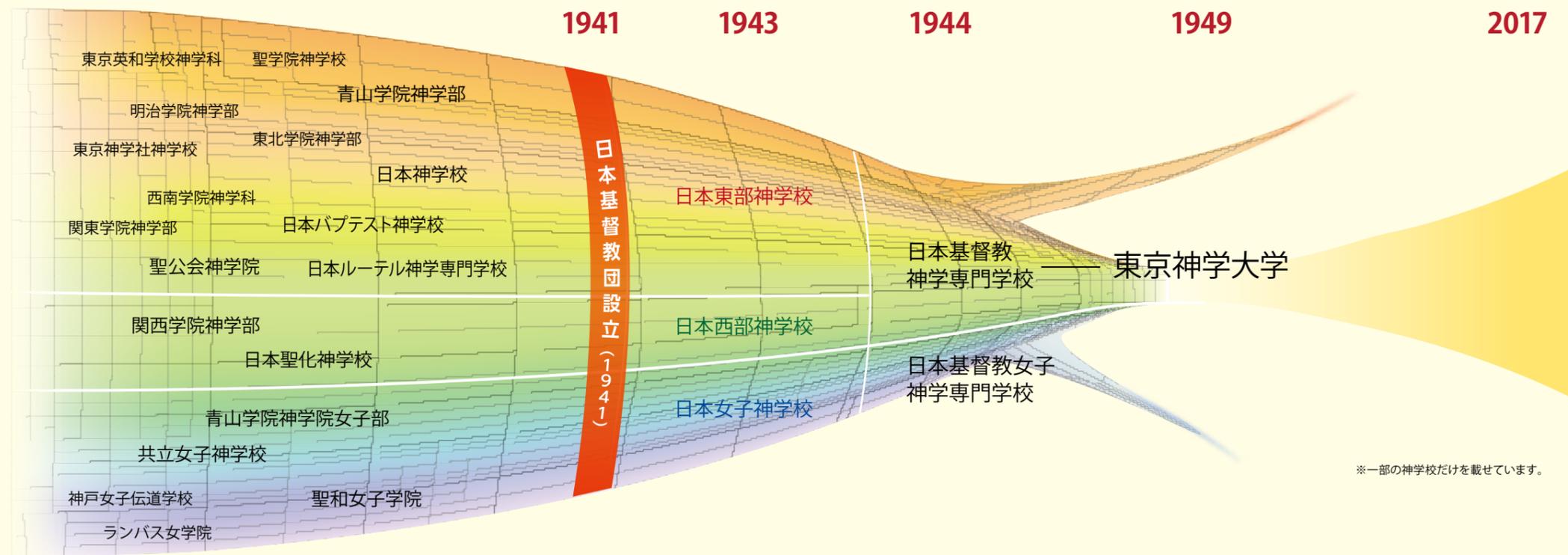


東京神学大学の歩み

東京神学大学を形作って来た人々



※一部の神学校だけを載せています。

東京神学大学の歴史

日本でのプロテスタント伝道は1859年に始まりました。宣教師たちが横浜や長崎に来て、伝道を始めたのです。最初の教会は1872年に横浜に設立された「日本基督公会」とされています。それに先立つ1863年、J. C. ヘボンはヘボン塾を開いています。宣教師たちは教会と並んで学校をも建てました。1873年にS. R. ブラウンが設立したブラウン塾は明確に伝道者養成を目指した学校でした。宣教師たちは日本人伝道者の養成を目指して、次々と神学校を産み出していったのです。

東京神学大学は英語の名称に「UNION (合同)」という言葉が入っているように、合同神学校です。東京神学大学のルーツとなった神学校の名前をすべて挙げることはとてもできません。改革長老系では、上に挙げたブラウン塾は明治学院神学部や東京神学社となり、メソジスト系の神学校は青山学院神学部となりました。ここに聖学院神学校も加わっています。バプテスト系では、西南学院神学科と関東学院神学部が合同して日本バプテスト神学校が生まれました。1941年に諸教派が合同して日本基督教団が誕生した後、1943年にはすでに挙げた神学校を初めとして8つの神学校が合同して日本東部神学校が設立されました。同じように関西学院神学部を中心として3つの神学校によって日本西部神学校が、また青山学院神学部女子部、共立女子神学校等4つの神学校によって日本女子神学校が生まれました。このようにしてほとんどの神学校が合同しましたが、そこに加わらなかった神学校もありました。さらに翌1944年、東部、西部の神学校は合併して、日本基督教神学専門学校と



第1期生と教授たち

なり、日本女子神学校も日本基督教女子神学専門学校と改称しました。戦後、1948年に日本基督教女子神学専門学校は閉校し、その流れを受け継ぐ一方、8つの神学校が教派単位での教団離脱や学校復興等によって離れていくことになりました。こうした経緯で、日本基督教神学専門学校は1949年、新制大学の東京神学大学となったのです。

このように、ほぼすべての主だった教派にわたる神学校の合同によって東京神学大学が形作られてきたこととなります。本学の神学は、公同教会の伝統に根ざし、宗教改革の福音的信仰を堅持し、福音的公同教会の形成に仕えようとするものです。歴代の教員たちもさまざまな教派的伝統の中で育てられつつ、合同教会である日本基督教団の伝道と教会形成に資することを追い求め、さらには広くアジアのプロテスタント教会が堅く立てられること願って、研究と教育を行ってきています。

北森嘉蔵 きたもり かぞう



略歴 1916年熊本市にて誕生、旧制第五高等学校分科在学中にルーテル教会で受洗。1935年日本ルーテル神学専門学校へ入学。1938年京都帝国大学文学部哲学科入学、田辺元に指導を受ける。1946年30歳で『神の痛みの神学』新教出版社より刊行。1949年東京神学大学教授となり、組織神学を教え、1982年に定年退職。1950年代々木上原教会牧師の赤岩栄の「共産党入党宣言」のゆえに24名が脱退して、教団西原教会（現、千歳船橋教会）を創立。主任担任牧師として1996年まで46年間牧会。1998年召天。

神の痛みの神学

キリスト教が日本社会で市民権をもち、日本の神学が世界のキリスト教界で市民権をもつために重要な貢献を果たした人物が北森嘉蔵と言えよう。1916年熊本市出生後、のちに五高在学中にルーテル教会で受洗し、佐藤繁彦を慕って大学に行かず日本ルーテル神学専門学校に入学し、卒業後に京都帝国大学に進んだ。

京大在学中に、北森は西田哲学と田辺哲学を学びつつ、神学的構想を盤石なものにした。この時期に『十字架の主』を公刊して(1940年)神学の基本構想を発表したが、その結果が『神の痛みの神学』(1946年)の出版に至り、思想界で脚光をあびた。30歳の時である。『神の痛みの神学』は版を重ね、すでに古典的名著として取り扱われ、英語、ドイツ語、スペイン語、韓国語に翻訳出版されて世界に広く知られ、マイケルソン、モルトマン等欧米神学者の注目するところとなった。

北森は1950年より46年間、日本基督教団千歳船橋教会で牧会を兼務しつつ、8年に亘って朝日カルチャーセンター（新宿）で旧新約聖書講話をした。その内容を『詩編講話』、『創世記講話』等、10数冊の講話シリーズとして発行。

神の痛みの神学は個教会を超えて、教会一致を目指すエキュメニカル運動の基礎神学としても展開され、その具体化として日本基督教団の『合同教会論』(1993年)が示された。(朴 憲郁)

【主な著書】

- 『神の痛みの神学』新教出版社 1946年
- 『救済の論理』創元社 1950年
- 『宗教改革の神学』新教出版社 1960年
- 『人間と宗教』東海大学出版会 1965年

熊野義孝 くまの よしたか



略歴 1899年に芝高輪に生まれる。植村正久の東京神学社に学ぶ。学生時代にすでに植村正久の『福音新報』の編集を手伝い、記事を執筆。その後、日本基督教函館教会牧師を務めた後、東京の武蔵野教会牧師になる。同時に日本神学校講師となり、その後日本基督教神学専門学校を経て、東京神学大学教授。組織神学、新約学を教えた。数多くの独創的な著作を執筆し、全集にまとめられている。

『教義学』全3巻

熊野義孝はデビュー作『終末論と歴史哲学』で終末論的思惟を神学の根本姿勢に据えた。これはカール・バルトの『ローマ書』に匹敵するもので、当時西田幾多郎も称賛したことで知られる。しかし、熊野は同時に宗教史学派のトレルチをも評価し、その視点からきわめてユニークな『基督教概論』を執筆した。そこではキリスト教の本質が宗教的な仲保・媒介の問題として掘り下げられ、歴史的相対主義に陥ることなく、神学の営まれる場としての教会が終末論的な歴史形成の主体として明確に定位されるに至っている。また『教義学』全3巻の執筆に取り組み、日本における最初の本格的な教義学の集大成を結実させた。歴史的教会という主題を日本で最初に神学の視座に据えたのは熊野義孝である。キリスト教は単なる聖書主義や観念的な精神主義、あるいは心情主義であってはならない。キリスト教は歴史的な身体を持つ。それゆえ普遍的な公同教会の客観的な信条の上で、福音的な宗教改革の精神に則ってキリストの身体としての教会を形成すべきである。熊野は留学経験こそなかったが、欧米の文献を読みこなし、日本の教会を神学の座として独自の道を切り開いた。その学統を継ぐ光栄を感謝したい。(芳賀 力)

【主な著書】

- 『弁証法的神学概論』1932年、『終末論と歴史哲学』1933年
- 『キリスト論の根本問題』1934年、『現代の神学』1936年、『基督教の特異性』1937年
- 『教会と文化』1941年、『教会と信条』1942年、『新約聖書神学の諸問題』1943年
- 『トレルチ』1944年、『基督教概論』1947年、『基督教の本質』1949年
- 『教義学1-3巻』1954-1965年、『キリスト教倫理入門』1960年
- 『日本キリスト教神学思想史』1968年